

## 下關償金の支拂に就て

渡邊 轍

## 一

下關償金の由來に就て詳述するのではなく、たゞ幕府が國事多難財政窮乏の時に三百萬弗といふ莫大な償金を不本意ながら承諾し、何時これを支拂つたかに就て（其財源に就てではない）しらべて見たい。此償金が極めて不條理な要求であることは當時既に内外に非難が高かつた、下關砲臺の砲撃によつて損害をうけた米佛蘭三國のうちで米佛二國は直に損害以上の復讐を長州藩にしたばかりでなく、幕府からも損害の賠償を得て居るが、長州藩が尙も下關砲臺を以て海峽を扼して居るといふので、英米佛蘭の四國聯盟で之を武力に訴ふることとなり、元治元年九月の下關砲撃は多大の損害を長州藩に與へた上に、尙表面上幕府が日本の主宰者である處から戦費並に下關市街を焼打し

なかつた爲の償金を幕府に要求し、幕府も事實に於て長藩を抑ゆる力がなかつたけれども、償金問題は四國と長藩との問題で幕府の關知する處でないとは言はれず、濫々ながら承認せざるを得なかつた。四國でも此償金に、さまで執着したのではないが、たゞ之を以て幕府に開港を迫る屈竟の材料として巧に之を利用した、されば其金額も、はじめ英國公使オルコックと米國辦理公使ブリュキンとの相談では高く見積りて二百萬弗であつたのを佛國公使ロツシュの議で三百萬弗と増額した。<sup>(二)</sup>公使等の意見では金額が少なければ早く皆済し得るから額を大にし日本をして止むを得ず他の港を早く開かしめようとのことであつた。幕府こそよい迷惑である。併し幕府でも朝廷其他の關係から兵庫大坂等を早く開くことは到底六ヶしいから、むしろ償金をといふわけで、此下關償金と開港問題とが常にもつれ合つて最後まで幕府を苦しめて居る。

## 二

さて、此下關償金の支拂であるが、元治元年九月二十二日 西曆千八百六十  
四年十月廿二日 に調印せられた下關取極書第二條に

右<sup>○</sup>償 拂方の儀は各國目代より此取極書の本書 ○條約彙纂に註して  
批准をいふとあり 並各國政府よりの命令を受け大君  
政府に報告する日附より右總高を六割にして則五十萬ドル 三箇月  
毎に 宛四季に 拂ふべし

とあり、幕府では十月三日 千八百六十四  
年十一月二日 老中水野和泉守阿部豊後守の連名で書を四國公使に贈て右

取極書の承認即ち批准をなして居るが、四國政府の批准及それが幕府に達した時日は明かでない、

米國スタンフォード大學トリート教授の小冊子「下關償金の返還」によれば

償金<sup>(三)</sup>第一回の支拂額五十萬ドルは華盛頓政府の批准が遅れたから千八百六十六年四月まで支拂は  
なくともよいのを、日本では千八百六十五年八月第一回の支拂をなした。

とある。千八百六十六年四月は慶應二年二月十六日から三月十六日まで、千八百六十五年八月は慶應元年七月に當り、日本の記録でも實際七月朔日から十日に亘て外國奉行田村肥後守目付小笠原刑部の手から横濱で四國公使へ第一回の支拂を交附して居る、且慶應元年六月で第一回支拂の期限がされることは多くの文書に見え、田村肥後守等は幕命で支拂に就て六月末から四國公使と交渉して居るが、同年二月から三月に亘て幕府は長州處分尙決せぬのを名として償金支拂の延期を交渉し、公使等は交、償金を止めて開港すべきを幕府に勸告し、幕府も衷心之を望みながら尙京都の形勢士民の不平を慮て開港はとて急には行はれぬから償金を拂ふ外途なきを告げて居る。元年四月朔日外國奉行柴田日向守と佛公使との對話に佛政府が延期を諾せることが見ゆるから、  
下關償金一件書類、舊  
幕下關償金書類抜萃、六月といふ期限も條約面の期限でなく、米國を除き他三國の取極書の批准は元年はじめには幕府に達したとしても、米國の批准が後れたとしたら、尙拂はなくともよいのを、外交上の智識に乏しか

つたから之に乗ぜられたことと思はれる。

### 三

幕府はかくて第一回の支拂を終へたので第二回は九月中、第三回は十二月中となる、しかも疲弊せる幕府は到底負擔に耐えないので第一回の支拂と同時に第二回支拂を明年六月まで延期せんことを四國公使に要求して居る。公使等は其趣を本國政府に通じたのみで幕府の要求は容れられなかつたばかりでなく、重大なる事件が其年九月四國公使によつて起された。

慶應元年五月、サー、ハッシー、パークスが英國全權公使として來任するに先ち、英國代理公使ウインチエスターは下關償金三分二を撤回する代りに日本をして兵庫大坂を速に開かしむること、日本との條約は將軍の承認だけでは不十分故、更に皇帝の批准を要むること、及關稅の遞減に就て主張せるが、下關償金の返還これ皆英政府の命によることと信ぜらる。パークスの來るに及び、是等の主張に就て積極的行動に出でんとして機を窺て居たが、將軍家茂、老中以下を隨へて大坂にあり江戸には留守の老中あるのみだから、彼は他の公使を説得して共に大坂に赴き兵威を示して強請するあらんとした。九月十二日西曆十月三十一日彼は、下關償金二回目の支拂を一年間延期せんことを請へる老中から英國代理公使への書翰につき、英政府からの命令を急に行はん爲に同僚と共に最速なる手段として

大君と共にある執政と談判せん」との書を江戸の老中に贈りて、翌十三日十一月十一日艦隊を提げて横濱を發し十六日攝海に入つた。此事は幕末史上の怪事件であるが、下關償金支拂の延期といふことがパークス等をして攝海に進入せしむる口實の一となつたのである。舊幕下關償金書類拔萃

時に將軍家茂は長州事件奏聞の爲に京都にあり、四國軍艦の大坂に入港したと聞ても、さまで驚く様子もなかつたが、歸坂してパークス等の要求を聞くに及びて、驚愕措く處を知らず、天下の安危此時に在りとして急に一橋會津の二侯を召致し、尋で勅命による阿部松前二閣老の罷免、將軍辭職東歸の紛擾となり、約半月の間京畿地方の波瀾萬丈、かくて得たものは條約勅許の一事のみで開港のことは尙も行はれず、償金の督促には直接觸れなかつたが、十月七日西曆十一月廿四日に老中松平伯耆守外國奉行山口駿河守が、兵庫でパークス等に條約勅許の次第と兵庫開港を止められたことを告ぐると、パークスは二年後には必ず開くべき港を兵庫は慶應三年十二月七日から開く筈少し期を早めて今開かば下關償金二百萬弗三分を支拂はずして可ならんにと勧めたが、伯耆守は時勢尙開港に適せぬから、むしろ償金を出した方がよい、第二回の支拂期は九月中で金額は既に調へあるから公使等の東歸を待て渡さうと對へパークス傳同時に伯耆守から四國公使に贈つた老中連署の書には下關償金の第三度目は約定通り十二月に拂はう、稅改方の儀も委細承知したから江戸にて談判せんと言って居るので開國公使等は承諾して八日に兵庫を退帆した。

四

斯の如くして幕府は下關償金二回以後の支拂を延期する事が出来ず、二回三回とも慶應元年中に支拂はなければならぬ、併し九月から十月にかけては紛擾の中に過ぎたので交渉も進まず、十月二十八日在府の老中水野和泉守から四國公使への書簡に「下關償金支拂のことを大坂表から申越したから再度の分は既に渡した」といひて三回以下の支拂を兵庫開港まで延期せんことを要めて居る、實際第二回の支拂を了したのは十一月二十二日で、それまで双方の交渉あつたものと思はれるが、或は幕府で支拂を聲言して準備中だから公使等も黙認して居たのかも知れない。慶應元年十一月二十二日は西暦千八百六十六年一月八日で、其日附の各國公使の償金二回目の受領書は我記録に見ゆるし舊幕下關償金書類按萃トリート教授は一括していふ。

償金の支拂は長引いた、第一回の支拂から計て十五ヶ月の後即ち千八百六十六年十二月一日○慶應二年十二月二十五日が最後の支拂であるべきに、結末がつくまでには殆ど七年間經過した。第二回の支拂は千八百六十六年一月八日○慶應元年十一月二十二日第三回は同じく五月十六日○慶應二年四月二日に行はれた。其後幕府は殘る三回の支拂延期を要求し、四國は六月二十五日○慶應二年五月十三日に其満足するやうに税則が低減せられながら悦で之を承諾した。此拒むべき改正税律が日本をして千八百九十四年まで無効に惱ましめ

た。下關償金の返還

これで第二回の支拂は分明したが、さて第三回の支拂である。幕府は四國に聲明したやうに十二月中に支拂ふ積りであるが財政の困難で意の如くならない、そこでまづ水野和泉守の延期要求となつたが公使等は取合はない、十一月二十四日慶應元年老中松平伯耆守、海路大坂から横濱に著し、直に佛公使ロツシュと會見し翌二十四日バークスと會す、バークスは水野和泉守の書が其意を得ず、大坂の約定を横濱に歸ると直に違ふやうなことでは條理立たず、償金の延期も本國政府に傳ふることが出来ないといひ、伯耆守は和泉守の書は彼れ一己の意見ならずと辯じ、第三回の償金五十萬弗は十二月晦日限り渡すべきやう盡力すべきも、財政極めて困難の際だから確とは請合ふことが出来ないといひ、バークスは十二月晦日までにいよく五十萬弗御渡しあらば、償金半分は濟むわけであるといつたばかり會見は不得要領に終つた。稻葉家書類、舊幕下關償金書類按萃

十二月十二日、老中水野和泉守、松平伯耆守、若年寄稻葉兵部少輔、勘定奉行井上備後守等外國奉行菊池伊豫守、栗本安藝守等奉行横濱に赴きて英佛兩公使と談判して償金の延期を得んとした、バークスは日本政府は勝手の申出ばかりして居る、自分の職務は條約を守ることで條約廢起の權がない、償金のことも本國へ申送ることが出来ぬと言放つ。和泉守等は償金の内二十萬弗は繰合せて渡すべきも殘高三十萬弗は來年三月まで猶豫ありたいと言ふ、バークスは外國に對し懇親を表せらるゝ事實あらばその廉

を以て政府に傳へん、例へば貨幣改鑄税則改正のやうな事件は外國の爲ばかりでなく日本の爲だなど虫のよい言をいふ、結局此時も有耶無耶に終つた、（四） （箱葉家書類） しかし幕府は尙も斷念せず外國奉行等をして公使と折衝せしめ、遂に十二月二十八日に至て第三回支拂額五十萬弗は慶應二年三月晦日まで支拂を延期せしむることに成功した。（舊幕下關償金書類抜萃） かくて漸く切抜け得て二年四月に第三回を支拂つた次第である。

匏菴遺稿に左の記事あり少し長けれど引用す。

上略 同年十二月二十二日 ○慶應元年 勘定奉行小栗上野介營中に於て窃に予 ○栗本鋤雲、當時安藝守、外國奉行 を小陰に招き

戯れ半分に年も痛く押詰たるか財政も痛く押詰たり、何れにてか五十萬圓程引き出す工夫はある間敷哉、當暮の仕拂を爲したる跡は文久錢二十四萬圓を剩しあるのみなるが、是は來春に至り直上を觸れ出したる後に賣り出せば五十萬圓に成る故夫迄何と歟仕方は無き者歟、差詰め處當暮外國人に渡す下關償金第一期渡方に支たるが今見すく損を爲し錢を賣る氣も無しと語りたる故予笑ひながら夫は眞實の談歟又は戯言かと問たるに、上野答へて年内餘日なし何ぞ戯言の暇あらんや予再び答へて僕別に工夫の仕方無けれど唯下關償金のみの差支とあらば來年三月迄に延べ來三月に至らば再び六月に順延すべき腹案なきにあらず兄眞に窮迫せは予今より其策に取掛らん、上野愁眉乍ら開け輒然として大笑し妙々其策果して成らば予は大手を振て新年を迎へんと 略中

直に同行して用部屋に至り老中水野和泉守に申したるに和泉守も大に喜び至極然る可しと有りたれば 略中 横濱に至りて先づ米國代理公使ホルトメンの許に到り面會を請ひ 略中 次に曰く 略中 下關償金一條最早第一回の期限に迫りしが承知の如く此償金は四國軍艦費と下關市街を焼拂はさりし爲めに出す所にして我か政府能く長藩の事を處置するに於ては元より債るに及はざる可き約定なり扱其處置の順序は國內の都合もありて是迄遅延に及ぶと雖も大君既に其の爲め京師にあり目今専ら着手中なる事は判然たれば此期は償金を渡さず延べて來三月に至り猶ほ依然たる模様ならば其時に到り仕拂ふ可しと思ふ貴君は其事を以て理に當れりとするや如何 略中 去て英館に到り公使に面して説く事米館に往きし時の如くすれど中々受付す口角泡を吹て我か不信負期を罵責す 略中 忽ち一小官奥より來り公使を呼て入らしむ是蓋しホルトメンの來りて密話せしなり問ありて公使再び出來り前には似ず溫顔にて申込の通り來三月迄延期すべしと答へたれば近頃忝なしと謝し、去りて佛蘭二公使に至り一通り前の如く述べ英米二國既に予が請に應せりと云たるに何れも違言なかりければ江戸に歸り報ずるに及て上野大に撫掌感嘆し共に和泉守に面して其勞を慰したる 略下

自分をはじめ此文を讀で大に疑つた、否今でも全部は信じない、第一期の渡方云々から既に誤て居るし、俊敏なる小栗上野が年末に迫て居る二十二日にかゝる言あるは實に可笑しい、また安藝守はそれより十日以前には水野松平の二老中に隨て横濱に赴き談判にも列したことと思はるゝに、旬日

の後に無造作に斯る議を發し如何にも無造作に成功して居る、言はゞ「談何ぞ容易なるや」である。併し事實に於ては、外國奉行と各國公使との交渉によつて第三回支拂は、前記の如く十二月期限を二年三月晦日まで延ばすことが出來、十二月二十八日付にて小栗上野介と栗本安藝守連名の證書を四國に出して居るので、舊幕下關償金書類拔萃延期談判に安藝守の力あるに相違ないが、舊幕下關償金書類拔萃飽菴遺稿の記事はたゞ幾分誇大したやうに思はれる。

## 五

幕府は第三回の償金支拂に先ち慶應二年二月二十九日老中連署の書を四國公使に贈て、長州事件につき軍費莫大なるを理由として四回目以後の支拂延期を要求して居る、之につき公使等は多大の同情を幕府に示して居るものゝ、此頃幕府が横須賀造船所の設備に多大の費を要せるを見て、之に就ては小栗、栗本二人の功大なること飽菴遺稿に見ゆ償金以上の費を軍備に要しながら償金を忽にするは不可だとパークスは説て居る、幕府はまた苦衷を述べて税則改正によりて既に外國の便を圖つたことから、軍備の必要と造船所の費用は一時に要するのではないこと、將軍以下久しく大坂に滞留して費用豫算の十倍せしことなどを告げて辯解に勉めて居る。慶應二年五月廿一日志中連署の書○舊幕下關償金書類拔萃結局トリート教授の言の如く此年五月税則改正の實が擧つて各國ともに満足したから自然償金の支拂延期は各國の承認する處となつた。

斯く幕府は外交問題に苦しめられ、内では征長軍振はず、七月將軍家茂薨去、尋で慶喜の襲職となり、十二月には孝明天皇崩御、不幸續きに年を送て慶應三年となる。其正月から二月に亘て、またも四國公使から下關償金の督促が來た、公使等の主張は日本政府の財政困難を知て四回以後は延期したけれども、第三回を受取てから一年を経過したから最早待つことが出來ない、其間日本では海陸軍に收入を費しながら、約束せし償金を拂はぬのは不都合である、殘額は西洋の五月十五日四月十日八月十五日六月十七日十一月十五日十月二十日を期して三回に拂はれたいと言ふにある。四月幕府は之に對して更に延期を求め、大凡一ヶ年以内には調達すべき意あるも、其時となつて更に延期を請ふやうならば不快であるから、總高皆濟は今から二ヶ年を期したい、尤も利子は支拂ふと對て居る。舊幕下關償金書類拔萃これ以後の幕府側の書類はまだ見ないが、要するに此年、政機急に動て十月十四日の將軍慶喜の政權奉還となり、十二月九日王政復古の大號令となる。見るべし、下關償金の督促は幕府の最後まで續き、幕府では三回分百五十萬弗を支拂つただけで、あとは督促をうけながら支拂ひ得ずして明治政府に委した譯である。

## 六

更に此不祥な償金を四ヶ國が如何に分配したかと見るに、英公使オルコック米代理公使ブライン

は下關砲撃に従事した四國軍勢の割合で配分すべきを唱へ、佛公使ロッシユは配分には道徳的に考慮すべきを説いた。尋で英國外務大臣伯クラレントンが四國間の道徳的見地から償金は等分すべきを主張したので他の三國も無論これに同意した。されば軍勢の多寡から言へば、英は得るところ最も少く米は最も多く得ることとなる。斯くきまつたものの、更に四國會議の結果、米佛蘭の三國は一八六三年（文久三年）に下關で砲撃せられた賠償の意味で償金の中からまづ十四萬弗づゝを受取ることゝなつた。十四萬弗といふ額は一八六四年（元治元年）に一旦締結せられた日佛條約、<sup>(a)</sup>即ち幕末史上有名な巴里の廢約の期定を其まゝ茲に採用した次第である。斯て償金の分配額は三百萬弗のうちから、三國へ各十四萬弗づゝを差引いた殘額を四等分することゝなり、英國は六十四萬五千弗を得、他の三國は各七十八萬五千弗を得ることゝなつた。

七

下關償金の第三回分を支拂つた慶應二年から翌年にかけては、日本國內實に多事、徳川幕府は最大受難の秋であつた。將軍慶喜の政權奉還から、王政復古の發令、朝廷の政變となり、尋で戊辰の戰亂となつた。明治政府は徳川幕府と諸外國との條約を其儘引繼いたので、下關償金未拂の半額も同じく明治政府に引繼かれた、併し新政府と四國との交渉により四國は茶と生糸との關稅が廉かつ

た爲め、償金支拂は一八七二年五月十五日<sup>明治五年四月九日</sup>まで延期することを承諾した。時正に明治政府草

創の際で、諸方面の改革あり財政は特に窮を告ぐる時であつたから、英公使パークスは日本政府に對し、外人に何か特權を與へて償金殘部の免除を申出たけれども、我政府は之を拒絶した。此時既に北米合衆國では下關償金に關して他の三國と歩調を異にして居る、合衆國の輿論は日本の政變――一八六八年<sup>明治元年</sup>の頃から下關償金は不條理なものであり、未拂殘部は固より已に受取つた分も、日本へ返還すべきであるといふ論が漸次隆になつて來た。そこで合衆國は下關償金の支拂を日本に強要しなかつたので日本政府も合衆國と他の三國とに對して支拂を個々にしたらしい。トリート教授によると

日本は金を借りて一八七四年二月<sup>明治七年</sup>米國を除き他の三國に第四回分を、五月第五回分を支拂つた、合衆國は日本に強要しなかつたから支拂を受けなかつたが公使秘書官フィツシユは公使ビシガムに日本は他國に支拂つたから米國に對しても義務を盡すべきことを告げた、それで六月に日本は米公使に二十五萬弗を支拂つた。最後の支拂は八月四日に行はれ、其日英公使パークスから米國の分を交付した。

とある。自分は日本の史料を見る機會がなかつたのは残念であるが、これで永年の下關償金問題も落著し、これで英佛蘭との償金問題は一切解決したが、たゞ殘るのは米國との問題である。

八

米國の輿論は流石に下關償金の不條理なるを理解し且自省した。前記の如く償金返還論も一八六八年<sup>明治五年</sup>頃から起て居るが、之を他に流用せんとする論も相當多かつたけれども、議會はこれに同意せずして償金で國債を購入して置いたから利子は年々殖えるばかりであつた。此返還論が議案として議會に提出せらるゝまでに相當の年月を要したのは法律上の形式と、議員等が興味を以て此問題を視たからである。斯て一八七二年<sup>明治五年</sup>に米國下院は爾後の償金支拂の不要なることを議決し、一八七六年<sup>明治九年</sup>には上院は六十四萬五千四百弗を<sup>○此額</sup>日本へ返還すべきことを議決した。此前後米國政府は日本政府に對して下關償金を返還するから教育費に充てゝ貰ひたいと交渉したけれどこれは涉々しく進まなかつた、<sup>下關償金處分始末書</sup>一八八一年<sup>明治十四年</sup>米國上院は償金の元利合して百四十六萬三千二百二十四弗を日本に還すことを議決し、翌年下院も同案を議決したが額は尙上つて居る。併し利子までも還す必要がないとの論もあり、また償金の一部を賞與としてワイオミング<sup>(A)</sup>號の水兵及<sup>(B)</sup>タキア<sup>(C)</sup>ンに移乗して從軍したデエムスタウンの水兵等に分配したいとの論もあつた、一八八二年<sup>明治十五年</sup>に下院が償金返還を議決した時、上院は前年の意見と違て之を承認しなかつた。そこで翌一八八三年<sup>明治十六年</sup>兩院の意見一致し日本への返還は利子を含まずして七十八萬五千弗八十七仙と決した。七

十八萬五千弗は米國が日本から受取つた下關償金全部で、八十七仙を付したのは何の意味かわからない、たゞ偶然から決定したと見るべきである。其他米政府は十四萬弗を前記二艦の水兵に分與したので總支出は九十二萬五千弗八十七仙となる、併し此年まで据置つた償金は證券と現金とで百八十三萬九千五百三十三弗九十九仙となつて居るので、尙殘額九十一萬四千五百三十三弗十二仙を存する譯である。

斯て國務卿秘書官フレリッダーセンは直に在東京合衆國公使ビンガムへ爲替手形を送り、ビンガムから國際儀禮の交換の後、日本外務卿井上馨へ手交せられた、時は一八八三年<sup>明治十六年</sup>四月二十三日である。井上外務卿は直に感謝狀を米公使に送り、日本政府は米國の好意を永久に紀念せん爲に返還された下關償金で横濱港の防波堤を築いた。<sup>下關償金の返還</sup>

九

以上で下關償金に關する小研究はほぼ盡きた、他日明治以後の日本側の史料を見るを得たら多少補ふところもあらう。下關償金は戰敗國に課する償金又は損害賠償の意味のそれとは性質を異にし全く取らなくともよいものであるが、四國は徳川幕府の弱點を見抜て居るので、額をも膨大として之に迫り、拂はなければ開港せよといふ、幕府は開港を欲しながら輿論の反對を恐れて、むしろ償金



を出す方を擇ぶといふ有様で、強者の不法と弱者の悲哀とを暴露して居る。たゞ後年の米國は好意は日本の感謝するところであるが、トリート教授は「日本が好意を記念した事業よりも善い事を爲したのは、同年に朝鮮から受取るべき五十五萬圓の償金のうち四十萬圓を教育費に充つる條件で朝鮮に還したことである」と言て居る、或は此事も米國の刺戟から來たと言へるかも知れなう。

註

(一) 米船 Pembroke の損害賠償として幕府は一萬一千二百弗を拂て居る。(The Return of the Shimomoseki Indemnity, By Payson J. Treat.) 佛國は一萬弗を要求して居る。(井野邊茂雄氏著幕末史概説)

(二) The Return of the Shimomoseki Indemnity; Reprinted from The Journal of Rice Development.  
下關償金事件。(米人ハウズ著。)

(三) The first instalment, of \$500,000 was not due until April, 1866, because the delay in securing ratification of the convention in Washington, but the Japanese made their first payment in August, 1865, (The Return of the Shimomoseki Indemnity).

(四) 貨幣改鑄の事は早くから一問題となり松平伯老守東歸の際に償金延期に就て貨幣製造器械を購入して新貨幣を製造する器械は佛國に注文してある。

税則改正のことは輸入品一般五分を標準をして低減せんとの議、本文「Treat 氏の文參照。

(五) 元治元年五月十七日（西曆一八六四年六月十二日）日本使節池田筑後守等が巴里にて日佛條約を締結したが幕府之を承認せず因て巴里の廢約と稱せらる、其うちに「長州藩が佛國軍艦に發砲せし償として使節日本に歸著の後三箇月にして十四萬弗の償金を拂ふべし」とある。

(六) 文久三年商船の砲撃せられた報復として下關砲撃した米國軍艦。

(七) 元治元年四國艦隊の一艦として下關砲撃に参加した米艦。

(八) 明治十五年七月朝鮮事變により八月濟物浦條約結ばれ償金五十五萬圓を朝鮮から拂ふこととなつた、其うち四十萬圓を還附したことを言ふ。